

## 学校教育における「自己実現」に関する一考察

－E・フロムの教育関係論に着目して－

学校教育専攻  
総合学習開発コース  
徳増純子

指導教官 小西正雄

### はじめに

2002年度、新しい指導要領に基づく教育課程が、小・中学校において完全実施され、各学校では「生きる力」の育成計画や「総合的な学習の時間」のカリキュラム作りといった教師の熱心な支援策が試みられている。しかし、このような中、富山市立堀川小学校では、特に新しい改革策を講じてはいない。堀川小では、授業を子どもが「自己実現」していく場ととらえ、教師は「子どもの能力に信頼をおく」として長年、実践を続けている。

そもそも公教育としての学校は、教師と子どもの「教育関係」を基礎条件として成立しているものである。しかし、田中智志は今日の「教育関係」に潜む問題に対し、子どもにとって教えられるという働きかけが他律化してしまっていることやこのような子どもに対して教師は過剰に教育的配慮を行っていることを挙げている。田中に従えば、現代の教師は、子どもとの新しい「教育関係」の模索が迫られているといえよう。

このような現代の学校教育における課題と対峙し、教育関係を見直すにはE・フロムの「自己実現」論が有効である。この理論は「自己実現」と「関係性」に着目して展開されており、今日の教育において、多くの示唆を得ることができると考えられる。したがって、本研究では、フロムの「自己実現」論を教育関係論として解

釈し、堀川小の実践理論も視野に入れながら、「生きる力」や「総合的な学習の時間」といった現代の学校教育における取り組みへの1つの手がかりを得ることを目的とする。

### 1 現代学校教育の動向と課題

まず、現代社会の現状と教育の動向を探るべく答申に示された内容を整理し、さらに、社会の変容と子どもや大人をとりまく教育の問題について、深く考察しているいくつかの説をもとに、現代学校教育の課題を見出した。

その結果、現代は人間疎外を生み出してきている社会状況であり、それゆえ人間性の発達をいかに進めるかという課題があることが明らかになった。また、現代社会が子どもの「自己形成空間」を崩壊させたことで、自己形成できない子どもにとって、学校で教えられる知識そのものも他者としてとらえることができず、素通りする実態がうかがえるという。このような現状をふまえ、今日の教育は「生きる力」に象徴される「主体性」や「個性」さらには「自己実現」を重視する方向にあるといえる。

以上のような現代の学校教育の課題と動向を考え合わせてみれば、これまでの教育関係を見直し、「生きる力」や「自己実現」を志向する教育への視点として教育人間学的な立場を挙げることができる。

### 2 教育関係論としてのフロム「自己実現」論

次に、教育人間学的な立場に立ち、E・フロ

ムの「自己実現」論に着目し、教育関係論として描出することを試みた。フロムの理論は教育関係論として語られたものではないが、この理論を貫くテーマは「被関係性 (relatedness)」であり、人間学的な立場が基盤になっている。

フロムの「自己実現」論は、「他者の自己実現をはかる中で、自己を実現する活動の様態としての生産性」を中核概念としてもつ。つまり、「自己実現」は単に主体者のみで完結するものではなく、他者とのかかわりである生産的活動を必要とし、「相互的自己実現」でなければならないということである。この過程は、まず「自らの諸力 (生産性) を発現する生産的活動」によって始められ、「生産的活動は他者との信頼に基づいた応答関係で十全になされる」ものであり、さらに「応答関係によって、互いに生産的オリエンテーション (関係づけ) が生成され、それぞれの自己実現へと向かわせ、相互的自己実現になっていく」ということができる。

この一連の過程において、フロムが重視しているのが、「生産的愛」と「生産的思考」である。これらは、「生産的オリエンテーション」、つまり他者とのよりよい関係を構築する上で、必要とされる態度を示している。したがって、特にこれらを中心に、教育関係論として解釈すれば、「他者性の了解」、「生産的な応答関係」、「自己生成と関係づけのダイナミズム」などの構成原理が見出されてくる。さらにフロムは、「相互的自己実現」に至る必要条件として、「信頼」を挙げているが、それは、他者への「信頼」とともに他者を信じる自らへの「信頼」を意味するとみなすことができる。

### 3 「自己実現」論とその援用可能性

教育関係論としてのフロム「自己実現」論からいえば、教師と子どもの関係は、教師が「子

どもをあるがままに見て、理解していく」という「他者性の了解」から出発しなければならない。また、それは、教師の子どもへの「信頼」に裏付けられたものである必要がある。なぜならば、そのことによって、教師と子どもが相互的關係になり得るからである。

さらに、子どもが「自己実現」に向かう「生産的オリエンテーション」を構築していくためには、教師との「生産的な応答関係」が重要である。フロムのいう「応答関係」は、他者に対する能動的な働きかけよりも、むしろ受動的な構えを重視する関係である。つまり、教師は子どもの実態を受けとめ、その働き返しとして支援をしていくという態度が大切になってくる。

教師が「生産的な応答関係」を通して、子どもとともに自己生成を行うならば、教育関係自体も生成され、相互的自己実現に向かうダイナミズムを創り出すことができる。しかし、ここには教師が自己変革の意識をもち、自らもまた子どもとの関係において成長していこうとする謙虚で弾力的な考え方を必要とする。

このようなフロム理論からみれば、堀川小の実践理論は、今日においても学ぶべき点が多いということができる。

### おわりに

現代の学校教育で課題となっている「生きる力」の育成や「総合的な学習」の実践は、生の子どもと教師のよりよい関係の中でこそ、実のあるものとなってくることが、本研究によって見出されてきた。ゆえに、これらの取り組みを含めた今日の教育において、教師は、子どもがいかに自分らしく成りきっていけるか、という視点に立ち、子どもとの関係を生成しつつ、日々の教育活動を創出していく姿勢が必要であると考えられる。